九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

正音学的表記と英語標準化の思想

林，哲郎
九州大学教養部 ： 教授

https://doi.org/10.15017/6795473

出版情報：言語科学. 9, pp.35-46, 1973-03-29. 九州大学教養部言語研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

正音学的表記と英語標準化の思想

林　　哲　　郎

I

十八世紀の英国社会における知性的特徴として，英国民の秩序と体系に対する強烈な意識と，法則と規範のもつ価値をこのうえもなく尊ぶという点を指摘するのが普通である。このような合理性を尊び基準をもとめる当時の一般的風潮が言語に対して作用するとき，それは母国語としての英語を合理化し，洗練し，固定しようとする傾向となって現われるのである。

周知のように，スウィフト (Jonathan Swift) がオックスフォード伯爵ロバートにあてた書簡は，

1. (i) *A Proposal for Correcting, Improving and Ascertaining the English Tongue: in a letter to the Most Honourable Robert Earl of Oxford and Mortimer, Lord High-Treasurer of Great-Britain.* (Swift, 1712)

という提案となっている。すなわち，かれは当時の一般的知性の水準を高め，文化的洗練を進めるための有効な方策として，英語そのものを「矯正し」(correcting),「改良し」(improving),「固定する」(ascertaining) ことが必要であると考えた。また，革新的な英語辞書編集家ベイリー (Nathan Bailey) は，スウィフトやウェルステッド (Leonard Welsted) の見解に関連して，つぎのように述べている。

(ii) So that what is necessary to be done is to endeavour to fix it (i.e. the English Tongue), and prevent its Declension; and to that Purpose the aforesaid applauded Author, and others moved the Earl of Oxford, then prime Minister of State to establish a Society or Academy (as has been done in France) for Settling and Ascertaining the Purity of the English Tongue, to set a distinguishing Mark on those Improprieties which had been introduc'd and made familiar by Custom, and to throw out vitious Words and Phrases and to correct others. (1736, Bailey, *Introduction*)

英語のなかの不適切で欠陥のある語句を指示し，これらを追放して，英語の純粋性を確立する文芸アカデミーの設立に触れているのである。また，直接に英語の発音に関連して述べたジョンソン (Samuel Johnson) のつぎのような英語辞書編集の目標も，注目すべきである。

(iii) This, my Lord, is my idea of an English Dictionary, a dictionary by which the pronunciation of our language may be fixed, and its attainment facilitated; by which its purity may be preserved, its use ascertained, and its duration lengthened. (1747, Johnson, *Plan*)

このような英語の純化ないしは純化された英語の固定という思想が，十八世紀の前半における一般的風潮をなしていたことは明らかである。ボー (Albert Baugh) は，十八世紀を英語を ascertain しようとする努力が最大限におこなわれた時期であったとしているのは，当然である。

以上のような時代思潮を背景として，十八世紀における一般英語辞書の編集者たちは，どのような話者の英語の発音を正確で優雅なものと考えたか，そしてこのような発音の表記と固定が英語標準化の問題にどのようなかかわりあいをもっていたかを，当時の辞書文献により考察してみよう。

II

英国における一般英語辞書の編集は，十七世紀初期のコードレー (Robert Cawdrey) の *A Table Alphabeticall . . . of Hard Vsuall English Wordes* (1604) の出版から，ベイリーの第一の辞書 *An Universal Etymological English Dictionary* (1721) まで，約120年が経過している。この期間に編集された代表的な辞書のなかで，英語語彙の解釈・理解だけでなく，その「話し方」に役立つようにと目論んだものも少数はあった。

まず，コッカラム (Henry Cockeram) の *The English Dictionarie* (1623) の副題には，'to the vnderstanding of the more difficult Authors already printed in our Language, and the more speedy attaining of an elegant perfection of the English tongue, both in reading, speaking, and writing' とあり，話し方の点でも優雅な英語を完成することを目標としている。さらに，ホーキンズ (John Hawkins) が改訂した *Cocker's English Dictionary* (1704) は，自らの推薦の辞によれば，'A Work necessary for all Persons who desire to understand their own Language, and would attain to Eloquence in Speaking, and Elegancy in Writing' であるという。確かに，辞書編集の目標が英語の語彙の理解にとどまらず，その 'speaking' の熟達にあったことは伺える。しかし，ベイリーに先立つ辞書編集者たちは，'Speaking' と 'Hearing' の重要性には気づいていたにしても，直接に視覚にうったえる表記方法を考案するにいたらなかった。また，そのような方法を実際に考え出して，これを辞書に採用するという新しい技術には，ついに到達しなかったのである。

かくして，英語辞書における採録語の正音学的表記 (orthoepic notation) は，ベイリーの第二の辞書 *The Universal Etymological English Dictionary: In Two Parts, Vol. I* (1727) においてはじめて実施された。英語辞書の歴史において，ベイリーの先駆的な正音学的表記の考案は，意義ぶかいものである。かれが，この辞書の表題に付したアクセント指示と，その序文における解説とは，以下に記録しておくに十分値するものである。

2. (i) "II. An Orthographical Dictionary, shewing both the *Orthography* and *Orthoepia* of the *English* Tongue, by I. Accents placed on each Word, directing to their true Pronunciation." (1727, Bailey, *Title-page*)

   (ii) And forasmuch as many Persons of a small Share of Literature and not very conversant in Books, are frequently apt to Accent Words wrong; especially those that are Technical, and such as are not the most common, I have placed

an Accent on that Syllable, on which the Stress of the Voice should be laid in pronouncing. (1727, Bailey, *Preface*)

この辞書の第I部は，1721年版への補遺(An additional Collection)の役割りをはたすとともに，綴り字法辞典と正音学辞典とを意図したものである。ベイリーは，普通でない語，および技術専門用語のアクセントを，古典語などに通じていない一般初学者や，英語を学ぼうとする外国人のために，正音学的表記法を採用した，としている。

実際にベイリーがおこなった表記法は，辞書の見出し語のうち，二音節以上の語のすべてに，第一アクセントを，アクセントのおかれる母音字と後続する音とのあいだに付したのである。その記号は，もちろん「鋭アクセント」(′)であった。かれがアクセントに関して，どのような理解を有していたかは，その辞書のなかのつぎの定義によって明らかになる。

3. (i) *Grave* ACCENT [with *Gram.*] is this Mark (ˋ) over a Vowel, to shew that the Voice is to be depress'd.

Acute ACCENT is this Mark (′) over a Vowel, to shew that the Voice is to be raised.

Circumflex ACCENT, is this Mark (ˆ) over a Vowel.

(ii) To ACCE′NTUATE [*accentuatum*, L.] to pronounce in reading or speaking according to the accent.

ACCENTUA′TION, a pronouncing or marking a Word, so as to lay a stress of the Voice upon the right Vowel or Syllable. (1727, Bailey, *Dictionary*)

ベイリーがフランス語の三種のアクセントについての知識を有していたことは，この辞書の定義によって知られる。かれは，序文および辞書の定義のなかで，「声の強勢」(a stress of the Voice)と称しているのは，英語における「高さアクセント」のみを意味しているのか，これに加えて「強さアクセント」も考えていたのか，明確でない。かれがフランス語に聞かれるアクセントの場合に，'depress'd' と 'raised' を用いているのに対して，'a stress of the Voice' は，「強さアクセント」を指すのではないかと推定される。いずれにしても，英語の「真の発音」を教示する役割りがアクセントの位置の正しい指示にあったと考えたベイリーの着想は，卓見であった。

一方において，ダイチ(Thomas Dyche)の *A Guide to the English Tongue* は，当時綴り字教本としてきわめて人気を博していた。1707年の初版から1729年までのうちに，14版を記録している。この書は，一般初学者と若い作家たちを対象として，日用普通の語と固有名詞に関して，分節法と二音節以上の語のアクセント規則を説明している。この書と，おなじくダイチの *A Dictionary of All the Words Commonly Used in the English Tongue* (1723)とともに，ベイリーに与えた影響は，疑うことはできない。当時においては，英語のアクセントは，文法書ないしは綴り字教本の取扱う領域であると一般に考えられていた。このアクセント表記を，英語語彙の正しい発音の指標として一般英語辞書に導入したベイリーの功績は，確かに大きかったと言える。それは，読む英語・書く英語から話す英語への認識が，辞書編集においてはじめて明確に表われ，従来の語彙に関する選択と定義とならんで，音声表記を辞書の重要な機能の一つとするのに貢献したからである。ベイリーの辞書(1727)の表題の説

明に 'A Work useful for such as would understand what they read, and hear; speak what they mean in a proper and pure Diction; and write true English' といっているのは，この音声表記の意義の理解に基づいている。

ベイリーの辞書 (1727) のアクセント表記は，言うまでもなくかれの第三の辞書 *Dictionarium Britannicum: Or, A More Compleat Universal Etymological English Dictionary than any extant* (1730) においてもひきつづいて採用された。そしてさらに，ダイチにより編集がはじめられ，パードン (William Pardon) により完成された *A New General English Dictionary* (1735) においても第一アクセント表記の方法が，伝統的な編集技術の一つとして，採上げられている。この後者の辞書の「序文」において，単音節語と多音節語におけるアクセント法則を解説しているのは，注目すべきである。

4. (i) In Words of many syllables, the Accent lies generally upon the third Vowel from the last; as in *Condemnátion*, *I'-dolize*, &c. but in Words that end in *ary*, the Accent lies upon the first Syllable . . . as, *Témporary*.
   (ii) So that it must be from the Conversation with the learned and most polite Persons, that Observations must be drawn to supply those Defects, that all the Rules and written Directions in the World cannot prevent . . .
   (1735, Dyche-Pardon, The *Introduction*)

この後者の引用は，アクセント法則の説明に関連して，英語が他国語とも異なり，また英国内でも南部人と北部人との話し方が違っていることを指摘したあとで述べられたものである。つまり，発音の基準を「学識がありもっとも洗練された人びと」の言葉に求めているのである。

以上の考察により，ベイリーとダイチ・パードンの先駆者の着想と考案から，アクセント位置の指示が「真実の発音」を教えるものとなり，また，発音の準拠すべき現実の話者に関する認識が深まったことが明らかになった。この三者の努力により，辞書の記録する語彙の音価は，書き言葉としてのみならず話し言葉としても機能するものであるという理解をうながしたのである。

III

純正な英語辞書のそなえるべき特質の一つとして，正音法 (orthoepy) を，理論と実際の両方の立場から意識的に採上げたのは，Benjamin Martin, *Lingua Britannica Reformata; Or, A New English Dictionary* (1749) である。マーティンは，辞書の特質の第Ⅲと第Ⅳとして，つぎの事項を，表題のなかで簡潔に示している。

5. (i) III. *Orthographical*; Teaching the True and Rational Method of Writing Words, according to the Usage of the most approved Modern Authors.
   (ii) IV. *Orthoepical*; Directing the true Pronunciation of Words by single and double Accents; and by Indicating the Number of Syllables in Words where they are doubtful, by a Numerical Figure. (1749, Martin, *Title-page*)

正字法の基準に関しては，しばらく措くとして，正音法が，語の単一アクセントと二重アクセ

ントおよび音節数の指示という二種の方法によって確立される，としているのは注目される。

すでにダイチにより，二重アクセントの表記方法 (″) は，文法書のなかで採上げられていた。しかし，ダイチ・パードンの英語辞典 (1735) においては，単一アクセントのみ示され，二重アクセントは放棄されたままであった。これをマーティンがその辞書で復活したわけである。かれの説明は，つぎのとおりである。

(iii) The single Accent shews the Syllable on which the Emphasis or Stress of the Voice lies, and the double one shews the same Thing if alone. But the Use of the double Accent is everywhere to denote that the Letter which begins the Syllable to which it is prefix'd has a double Sound, one of which belongs to the preceding Syllable. Thus the Word *A"nimal* is sounded with a double *n.* as *An-nimal.* (1749, Martin, *The Preface*)

マーティンによる二重アクセントの復活にもかかわらず，この表記方式は，その後の英語辞書編集者には採用されないままであった。

ダイチとベイリーにより開発された単一アクセントの表記は，編者不明の *A Pocket Dictionary* (1753)と，Bailey-Scott, *A New Universal Etymological English Dictionary* (1755) においても，同じく採用された。そして周知のように，Samuel Johnson, *A Dictionary of the English Language* (1755) もこの表記法を踏襲しており，ここに一般英語辞書の見出し語における単一アクセント表記法の伝統は確立したと見てよい。ジョンソン以後の辞書編集者たち，William Rider (1759), John Entick (1770), Frederick Barlow (1772), James Barclay (1774), John Ash (1775) は，すべてジョンソンに準拠したのである。

さて，ジョンソンのアクセント表記に関する見解は，つぎの引用によって理解されるであろう。

6. (i) In settling the orthography, I have not wholly neglected the pronunciation, which I have directed, by printing an accent upon the acute or elevated syllable. (1755, Johnson, *Preface*)

(ii) A′CCENT. 1. The manner of speaking or pronouncing, with regard either to force or elegance. 2. The sound given to the syllable pronounced. 3. In grammar, the marks made upon syllables, to regulate their pronunciation. (1755, Johnson, *Dictionary*)

ジョンソンは，収録語の第一アクセントに，鋭アクセント記号 (′) を付すという方式を採用したにすぎない。勿論，かれは変則的な綴り字の語には，発音の解説を加え，また古い時期の詩人の用いたアクセントとジョンソンの辞書のなかで記したアクセントが異なっている場合に，ジョンソン自身の解釈を示してはいる。発音を規制するためのアクセントの機能に言及していることは，注目すべきである。正音学的表記の技術に関するかぎりでは，ジョンソンはベイリー・マーティンの先例に従っただけで，母音・子音の音価そのものの表記については，創意を示すにいたらなかった。

英語の母音・子音の音価表記に関しては，ボズウェル (James Boswell) は『ジョンソン伝』のなかで，ジョンソンとの興味ぶかい会話を記録している。この伝記の1772年の箇所で，発音

を固定する辞書は有用であろうというボズウェルの言葉に対して，ジョンソンは，かれの英語辞典は語のアクセントを示している，と答えている。そして，つぎ会話がつづく。

7. Boswell. "But, Sir, we want marks to ascertain the pronunciation of the vowels. Sheridan, I believe, has finished such a work."

   Johnson. "Why, Sir, consider how much easier it is to learn a language by the ear, than by any marks. Sheridan's Dictionary may do very well; but you cannot always carry it about with you: and, when you want the word, you have not the dictionary... Besides, Sir, what entitles Sheridan to fix the pronunciation of English? He has, in the first place, the disadvantage of being an Irishman: and if he says he will fix it after the example of the best company, why they differ among themselves." (Boswell, *Life*)

ジョンソンの返答は，かならずしも本質的な部分に触れているとは言えない。しかし，音価表記に際して，上流階級の人たちの発音にも差異があるからという理由の一つは，注目すべきであろう。

IV

十八世紀後半において，もっとも進歩的な音価表記法を採用したのは，ケンリック (William Kenrick) の *A New Dictionary of the English Language* (1773) である。かれが表記しようとした英語音声の種類および，発音表記辞典編集の試みについて，つぎのように述べている。

8. (i) Their *Orthoepia* or Pronunciation in Speech, according to the present Practice of polished Speakers in the Metropolis. (1773, Kenrick, *Title-page*)

   (ii) To your Majesty, as... the most accomplished Speaker of the English Tongue, this Attempt, to ascertain the present State of its Pronunciation in your Metropolis, is dedicated. (1773, Kenrick, *Dedication*)

英語音声の基準に関するかれの見解については，後述することにして，まず，かれの音声表記の具体的な方式について考察しなければならない。

ケンリックはその「序論」のなかで，ビューカナン (James Buchanan) の *An Essay towards Establishing a standard for an elegant and uniform Pronunciation of the English Language* (1766) に関する批評を加えている。そして，(i) ビューカナンは北部ブリトン人 (North-Breton) であって，イングランド出身者でない。(ii) ビューカナンは，伝統的綴り字法と異なった綴り字様式を採用して，学習者を誤まらせる，と非難しているのである。ケンリック自身の表記法は，つぎのように要約して示すことができる。

(i) 揚音アクセント (′) と抑音アクセント (‵) の機能を区別して，おおよそこれに相当する第一アクセント・第二アクセントを採用している。

(ii) 見出し語の伝統的な綴字のほかに，分節法の綴字を示し，それぞれの音節の母音の上に数字を付して，その正確な音価を示すために，別表の番号を付した母音価一覧表の数

字と対照させる方式を採っている。

(iii) 子音については，たとえばローマン字体は‘hard’の音，つまり破裂音かまたは無声音，斜体字は摩擦音が有声音を示すという風に，字体によって音価の区別を示している。

以上のようなケンリックの表記法は，技術的にきわめて進歩的な性質を有していた。かれは，その「序論」のなかで，シェリダン (Thomas Sheridan) がすでに語の音声を区別するために，特別の音節の上に，ある種の「印刷上の記号」を用いることを提案した，と述べている。この言及は，シェリダンの『発音辞典出版計画』(1762) のなかの表記方式を指したものと見られる。おそらく，ケンリックはシェリダンから，上述のような表記方法を学びとったと推定される。

「明白で恒久的な発音の基準を確立する」という主目標をかかげて，シェリダンは，約20年の歳月をついやして *A General Dictionary of the English Language* (1780) を完成した。かれがその「序文」で述べている当時の英国の学校教育に対する批評は，卓見であるというべきである。

(i) 死語である古典語習得のために，英語そのものがおろそかにされている。

(ii) 発音器官によって耳に伝えられる生きた言葉を無視して，書き言葉を教育の唯一の目標にしている。

シェリダンの音声表記は前述のケンリックの方式をさらに精密にし，整理しており，また英語音声の理論を詳細に，精致に展開させている。表記法自体は，ケンリックの考案したものと基本的におなじであり，またつぎのウォーカーの方式とも類似している。

ケンリックにはじまった音声表記法の発達の頂点を示す著作として，ウォーカー (John Walker), *A Critical Pronouncing Dictionary and Expositor of the English Language* (1791) がある。かれの特色は，つぎのように要約することができる。

(i) 見出し語のつぎに，現在の音声記号に相当する音節を分けた綴り改めの表記法をかかげる。

(ii) 揚音アクセント記号 (′) を第一アクセント音節の後に付ける。

(iii) 母音字の上に数字を付して，その音価を別表の語の音価と対照させて示している。

以上の三つの特色は，ケンリックとシェリダンの表記方法においてすでに実行されたものである。これに，ウォーカーの考案した方式として，つぎの三点が追加して示されている。

(iv) 必要な語では，参照すべき音声規則を示す。

(v) 同一語に各種の発音が聞かれるとき，それぞれの理由を説明し，とくに「類推」の原理によってこれを解説する。

(vi) 語によっては，その2種の発音法の歴史的な典拠をかかげて，そのなかの好ましい発音を指示する。

要するに，ウォーカーの正音学的表記の特色のなかで注目すべきは，表記の基礎となる歴史的な音声資料を提供するとともに，これに「批判的な」解釈を与えている点である。

V

英国近代期，ことに十八世紀の英語辞書における正音学的表記は，技術的な面から見れば，かなり高度の発達を示したことが明らかになった。つぎに考察すべきは，このような音声表記の一種であるアクセント表記が，どのような基準に準拠していたか，そして，合理的な発音の設定が英語の標準化とどのような関連があったかという問題である。

すでにベイリーは，「真実の発音」(true pronunciation) を指摘すると述べ，またダイチにおいても，誤った発音を矯正するという辞書編集者の職能についての意識が強かった。ことに，ダイチ・パードンは「学識がありもっとも洗練された人びと」との会話から，準拠すべき音声規則は補われねばならない，と主張としているのは注目される。優雅にして正当と見なされる英語の発音は，学問的教養と上流階級の上品さを実際に備えた人びとの発音に，その理想的な典型を求めようとしているのである。このことは，マーティンが英語の綴り字法に関して,「現代のもっとも定評があり，優雅な作家たちの現在の用法に従うべきだ」(according to the current usage of the most approved and polite Writers of the Age) と言っていることと合わせ考えるべきであろう。

英語発音の基準に関して，十八世紀半ごろにおいてもっとも影響力の大きかった発言は，もちろんジョンソンのそれである。かれは，すでに『英語辞典編集計画』(1747) のなかで,「洗練された作家」(polite writers) とか「もっとも正確な作家」(the correctest writers) という表現によって，英語を規制するための権威としての具体的な人物を示している。実際の発音に関して，かれはつぎのように述べている。

9. (i) A new pronunciation will make almost a new speech; and therefore, since one great end of this undertaking is to fix the English language, care will be taken to determine the accentuation of all polysyllables by proper authorities, as it is one of those capricious phaenomena which cannot be easily reduced to rules.

(1747, Johnson, *Plan*)

(ii) There is a double pronunciation, one cursory and colloquial, the other regular and solemn. The cursory pronunciation is always vague and uncertain, being made different in different mouths by negligence, unskilfulness, or affectation. The solemn pronunciation, though by no means immutable and permanent, is yet always less remote from the orthography and less liable to capricious innovation. (1755, Johnson, *Grammar*)

発音のなかでもとくに多音節語のアクセント法の決定が，英語固定の一つの道標になるというジョンソンの考えがここに伺われる。ことに，ジョンソンの設定した二種のレベルの発音の区別は，注目すべきである。

(i) 粗雑で口語的な発音
(ii) 正規の格式ばった発音

つまり，ぞんざいな，くだけた発音は曖昧で不明確であり，未熟とか気取りなどによって，話す人ごとに異なってくる。これに反して，厳粛な発音は，一定不変というわけではないが，正字法から隔たることが少なく，改変を受けにくいという。

この二種の発音に言及したジョンソンの真意は，初期の英文典の編者たちが,「書かれたのとは異なった発音をされる語彙表」を，ぞんざいな言葉 (cursory speech) に従って作成してきたことに対する非難にあった。つまり，これらの初期文法家たちは,「もっとも下層の人たちの通語を言葉の典型として確立した」(established the jargon of the lowest of the people as the model of speech) とジョンソンは譴責しているのである。かくして，かれの発音についての基準設定に関する結論は，つぎのとおりである。

(iii) For pronunciation the best general rule is, to consider those of the most elegant speakers who deviate least from the written words. (1755, Johnson, *Grammar*)

ジョンソンの綴り字法に忠実に従った発音で，しかも優雅な話し手の発音を基準とするのは，確かに保守的な音声観であり，当時の正音学者たちからかならずしも支持されなかったのである。

前述の粗雑な発音と厳粛な発音に関するジョンソンの考え方は，強勢のない母音を，格式ばった場合とくだけた場合に，発音する際の明晳と不明晳 (distinctness and indistinctness) の混同である，とウォーカーは批判している。いずれにしても，ジョンソンの綴り字法にとらわれた発音観と，ことにかれが「最良の一般法則」と称するものは，ウォーカーの解説をまつまでもなく，保守的であり，言語の本質についてのかれの見解に妥当性を欠く面があるということを示すものである。前述のように，ベイリー・ダイチ・パードン・マーティンらの辞書編集者の音声表記の意図は，英語を生きた言葉として把握し，実際に用いられている優れた口語的発音に基準を置くことによって，これを恒久的に固定しようとする方向を目指したものであった。しかし，ジョンソンの綴り字に把われた保守的音声観は，ワイルド (H. C. Wyld) が指摘しているように，当時の一般的な趨勢に対する「反動のしるし」(signs of a reaction) を示すものである，と見るのは妥当であろう。そのような態度は，十八世紀初期から，あるいはすでに王政復旧時代以来の，大いなる言語的放縦とされていたぞんざいな口語的な発音の流行に対する一種の警告の意味をもっていたからである。スウィフトとポープ (Alexander Pope) の時代には，たとえ伝統的な正字法から逸脱した発音であっても，それは優雅・洗練という基準から外れたものとは見なされなかったし，また，上流階級の人びとの言葉遣いにそむくものとも考えられなかった，とワイルドは説明している。

「正規の謹厳な発音」を標準的と見るジョンソンの考え方は，当時の政界・社交界の主役を果たしていた権勢家チェスターフィルド (fourth Earl of Chesterfield) の見解によってさらに強められたと言えるであろう。かれは，ジョンソンとは少し異なった立場で，言葉の正確さと標準に関して説明している。ジョンソンの定義も，引用してつぎに示そう。

10. (i) The common people of every country speak their language very ill; the people of fashion (as they are called) speak it better, but not always correctly, because they are not always people of letters. Those who speak their own language the most accurately are those who have learning and are at the same time in the polite world; at least their language will be reckoned the standard of the language of that country. (Chesterfield, *Letter* 103)

(ii) *Politeness*: Elegance of manners; gentility; good breeding.

Elegancy: Beauty rather soothing than striking; beauty without grandeur; the beauty of propriety not of greatness. (1755, Johnson, *Dictionary*)

要するに，チェスターフィールドは，正確で標準的な言葉を話す人の条件として，つぎの二つを指摘している。

(i) 学識 (learning)
(ii) 良い素性 (politeness)

すでに，ジョンソンが "polite writers" とか "the most elegant speakers" という表現を用いていたことについては触れた。おそらくかれの 'polite' の認識は，高貴の出であるという素性の良さと，当時の宮廷ないしは上流階級に属していることから生じる優雅にして正確な英語の発音習慣を，現実の人物チェスターフィールドにおいて看取したことに基づいていたと考えられる。

VI

一方，ケンリックにおいて注目すべきは,「首都ロンドンの洗練された話し手」の発音，もしくは「首都の文人たち」(men of letters in the Metropolis) の現在の用法を発音の基準と見なしたことである。このロンドン英語の発音を強調することは，ケンリックがジョージ三世へ宛てた献辞のなかでも現われていることは，前に指摘した。シェリダンについて，すでにジョンソンが非難しているように，アイルランド出身であったことは，大いなる不利であった。かれは，英語発音辞典編者としての自らの資格を，その「序文」のなかで弁明しなければならなかった。その弁明の要点は，シェリダンの若い時期の教師はスウィフトの親友であり，またスウィフトは，英語がもっとも完璧の状態に達したアン女王の宮廷の英語に通じていた，ということにあった。

最後に，ウォーカーは，言語の至高なる調停者である習慣もしくは慣用 (custom) を分析して，これを形成する三種の人的構成を指摘している。

(i) 一般大衆の話し手
(ii) 大学で研究する人，その他学問的職業に従事する人
(iii) 高貴な生まれ，または高い地位により宮廷の洗練と優雅とに法則を与える人

そして，言葉の適切さを第(iii)の宮廷人のみに限定することを非難して，つきのように述べている。

11. (i) To confine propriety to the latter, which is too often the case, seems an injury to the former; who, from their very profession, appear to have a natural right to a share, at least, in the legislation of language, if not to an absolute sovereignty. (1791, Walker, *Preface*)

つまり，学識者も当然ながら，言語の適切さについて，これを法則化する生得の権利があるという。なぜなら，宮廷内の洗練された侍官たちさえも，服装や態度と同じく，素朴・純朴さから逸脱しやすいものであり，習慣よりも新奇さが，宮廷内の話し言葉の基準となることがしば

しばあるからである。

かくして，ウォーカーの与えた結論は，つぎのように述べられている。

(ii) Perhaps an attentive observation will lead us to conclude, that the usage, which ought to direct us, is neither of these we have been enumerating, taken singly, but a sort of compound ratio of all three. Neither a finical pronunciation of the court, nor a pedantic Graecism of the schools, will be denominated respectable usage, till a certain number of the general mass of speakers have acknowledged them; nor will a multitude of common speakers authorise any pronunciation which is reprobated by the learned and polite.

As those sounds, therefore, which are the most generally received among the learned and polite, as well as the bulk of speakers, are the most legitimate, we may conclude that a majority of two of these states ought always to concur, in order to constitute what is called good usage.

(1791, Walker, *Preface*)

合法的な発音は，学識者と上流階級とともに広く一般大衆の話し手の大部分のものに,「もっとも一般的に容認されている」(the most generally received) ような発音である，とウォーカーは結論を下だしている。正確な用法のための指針となるものは，(i) 一般大衆，(ii) 学識者，(iii) 上流階級の三者のなかのどれかある一種の発音ではなくて，これら三者のなかの「綜合化」とも言うべき発音である。ウォーカーが言う「大衆の話し手」(the general mass of speakers, the bulk of speakers, a multitude of common speakers) には，おそらく，ケンリックの指摘した「首都ロンドンの」一般の話し手がその考えのなかに入っていたであろう。ウォーカーの以上のような見解は，二十世紀において，ジョーンズ (Daniel Jones) やワイルドによって唱導された「容認発音」(received pronunciation) を基準とする考えに，継承されるはずのものであった。

ベイリー・マーティン・ジョンソン等十八世紀の代表的な辞書編集者は，語彙の綴り字法・慣用・定義の関するかぎりにおいて，辞書編集論的に，英語の洗練化と基準化に貢献するところが大であった。また，英語の語彙の配列と構成——つまり統語論の分野においては，ラウス (Robert Lowth)，プリーストリー (Joseph Priestley)，マレー (Lindley Murray) の英文法は，文法規則の設定と文の正否の判定に規範的役割りを果たした。正音学的理論と正音学的表記の技術においては，ジョンソンは強さアクセント表記による発音の標準化に貢献したにすぎなかった。しかし，かれに続くケンリック・シェリダン・ウォーカー等は，前述の辞書編集者と文法家に匹敵するほどの英語の標準化を，正音学的表記においてなし遂げた，と言えるであろう。

これら十八世紀の正音学者は，文法家・辞書編集者と同じように，言語が理性 (reason)・論理 (logic) によって支配されるものと考えたか，それとも慣用 (usage)・習慣 (custom) により一層つよく制御されるものとしたか——という問題がある。かれらは，確かに，「類推の原理」・「語原の原理」・快美な音調に基づく「最良の原理」などにより，合理的にして恒久的な発音の基準を設定して，英語の標準化の指針にしようとした。しかしながら，ウォーカーの「優れた慣用法」の考え方に代表されているように，正確にして優雅な英語の発音は，首都ロ

ンドンに住み，学識があって，しかも上流階級に属する人の発音——つまり，万人によって容認される典型的な発音の実践者に基準を求め，それを英語一般の標準化の基礎としたのであった。たとえかれらが英語の理想的な発音を追求するあまり，これを人為的に設定しようとした欠点は，ある場合，ある正音学者に見られたにしても，合理的で恒久的な発音を導き出すためには，やはり，音声的慣用・発音習慣という経験的な音声事実に立脚せねばならなかったと言えよう。

〔注〕

この小論は，昭和46年12月4日，慶応義塾大学（東京都港区芝三田）における第43回日本英文学会全国大会において,「十八世紀英語辞書における音声表記の意義」と題して，口頭により発表した内容を骨子としている。ここに，表題を「正音学的表記と英語標準化の思想」と改めた。そして，その内容と文章を修正加筆し，とくに基礎的文献を原典から引用補足して，全篇にわたって書き直している。

SYNOPSES OF JAPANESE ARTICLES

Orthoepic Notation and the Standardization of the English Language

Tetsuro Hayashi

The eighteenth century was a period of time in the history of English thought when every possible effort was made by noted orthoepists and lexicographers for improving, refining and ascertaining the English language to a greater extent than in any other periods. Thus, the principle of orthoepic notation, such as accentuation adopted in the general English dictionaries, was apparently intended to direct the true pronunciation as a means of the standardization of the vernacular in its phonological aspect.

The earliest attempt of marking accentuation was made by Nathan Bailey in his *The Universal Etymological English Dictionary* (1727) and *Dictionarium Britannicum* (1730). It is quite probable that Bailey was given a hint of adopting an accentuation system by the introductory treatise of accents in the works of Thomas Dyche (1707 and 1723). This system of accentuation was technically elaborated in Dyche-Pardon's *A New General English Dictionary* (1735) and Benjamin Martin's *Lingua Britannica Reformata* (1749). Martin's method in his dictionary of marking a single accent (′) and a double accent (‵‵) is noteworthy in the historical development of orthoepic transcription, and Samuel Johnson was merely a follower of Martin in his practice of implementing a single accentuation system.

Only in the latter half of the eighteenth century was invented the technique of describing the phonetic quality of vowels and consonants, primarily by Robert Nares in his *Elements of Orthoepy* (1784) and William Kenrick, and afterwards was developed by Thomas Sheridan in his *A General Dictionary of the English Language* (1780) and by John Walker in his *A Critical Pronouncing Dictionary and Expositor of the English Language* (1791). In practice, those orthoepist-lexicographers attempted to show the vocalic quality of words in their dictionaries by means of putting the corresponding figures (1, 2, 3...) upon the vowel letters, according to those figures of the vowels which were defined in the table of key words. As regards the quality of consonants, they employed a method of respelling the consonants in Italic or Roman types, according to the voiced or unvoiced, or other phonetic qualities. This kind of orthoepic notation finally led to an invention of the diacritic transcription in American

dictionaries and of other phonetic renderings of English words in British dictionaries which were published in the nineteenth century.

In his "Grammar of the English Tongue" appended to *A Dictionary of the English Language* (1755), Johnson makes account of 'a double pronunciation,' that is, 'one cursory and colloquial, the other regular and solemn.' His idea of setting up the best general rule upon the pronunciation of 'the most elegant speakers who deviate least from the written words' was probably influenced by Lord Chesterfield's assertion that the standard of English should be based upon the speech of 'those who have learning and are at the same time in the polite world.' Next, Kenrick is worth while noticing, because he regarded as standard 'Pronunciation in Speech, according to the present Practice of polished Speakers in the Metropolis,' the wordings being found in the title-page of his *A New Dictionary of the English Language* (1773). Since Sheridan was an Irishman, he was obliged to apologize for his qualification for the author of his English pronouncing dictionary, demanding recognition of the fact that his teacher was an intimate friend of Jonathan Swift, who was fully acquainted with the polite speech of the court of Queen Anne.

Lastly, John Walker expressed his opinion concerning good usage in the pronunciation of those persons, who mainly constitute:

(i) the general mass of common speakers
(ii) university teachers and men of other learned professions
(iii) persons belonging to the polite world and the King's Court.

His conclusion is that 'a sort of compound ratio of all three' should direct good practice in the pronunciation of the vernacular. In other words, the standard pronunciation should be based on 'those sounds... which are the most generally received among the learned and polite, as well as the bulk of speakers.'

Walker's opinion concerning good usage in English pronunciation can be said to make a prediction of the idea of 'received standard' postulated by H. C. Wyld, or of 'received pronunciation' explained by Daniel Jones in their phonological works in the twentieth century. It is thus shown that the standardization of the English language by means of setting up a rational and permanent standard in pronunciation was essentially based on the orthoepist-lexicographers' observation and analysis of the actual pronunciation of persons belonging to the learned and polite circles in the eighteenth century, rather than reason or logic as a principle of determining the accurate and true pronunciation, which might be artificially deduced from their philosophical speculation.